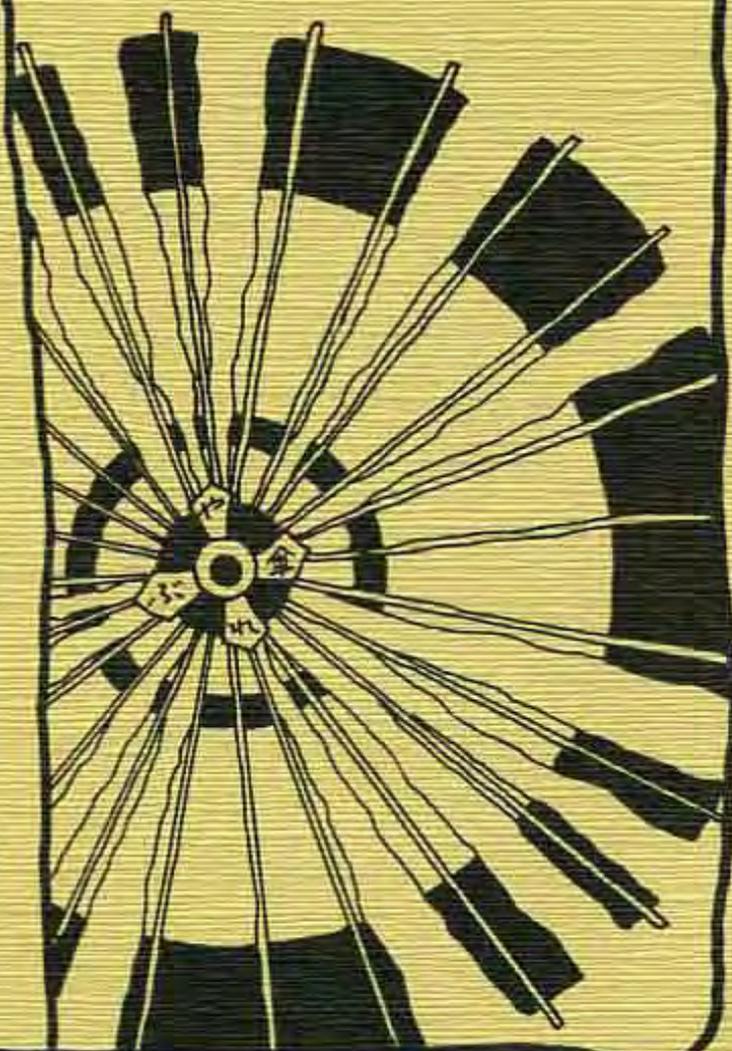


やぶれ傘



九十五号

二〇一七年四月

通らせてもらふ校庭土佐水木 根橋宏次

白梅の辺りに闇の来てゐたる きくちきみえ

県道に出ればコンビニ春めけり 大島英昭

春の海大棧橋の突端の 丑久保 勲

川風の届くところに雪柳 廣瀬雅男

桃の花咲いて青空駐車場 渡邊孝彦

踏切があり草あをむ土手の道 瀬島酒望

町中の蕎麦屋の卓の野火埃 青谷小枝

チャイム鳴るもう降り出して春の雨 安藤久美子

ひとしめり来て明け方の暖かき 藤井美晴

朝市の七輪に焼く目刺かな 菊池洋子

見せくれし馬穴の中の蝌蚪の紐 天野美登里

目ん玉はバスタの上のしらすにも 小山陽子

春眠の耳に社の鈴の音 白石正躬

向かひ家は鎖されしままに春落葉 秋山信行

抄 集 句 傘 紀 大 崎 夫 選

春一番胸のつかへを落としけり 久世孝雄

別れ行く日の学び舎に春時雨 有賀昌子

春一番じやんけんほいと子ら弾む 松村光典

雛の顔皆ふくよかに緋毛氈 山本久枝

枝垂れ梅柴犬の背に触れにけり 石塚清文

灯はあれど足跡見えぬ雪の家 石原健二

梅真白史跡の家に住む人も 岩藤礼子

バイエルのピアノの稽古ミモザ咲く 岡田香緒里

土手青む犬は行つたり来たりして 神山市実

紅梅とわかる苔となりにけり 黒澤次郎

葉牡丹を端正に植ゑ逝きにけり 眞田忠雄

指長き仏足石や下萌ゆる 貫井照子

青空に煙ひとすじ山笑ふ 野口希代志

庭隅に夜半に降りたる雪の跡 濱野 新

まんさくのもじやもじや咲けり空のあを 森 美佐子

目 刺

菊池洋子

五歳児のわしづかみして年の豆
盆梅の灯を消してよりかをりけり
日のくれの水輪のこして鳩
釣り人のうしろに鴉日脚伸ぶ
春寒し替くろぐろと柿の枝
落味噌をちよこつともりて志野小鉢
レガツタのかけ声すべる柳の芽
手のひらの豆腐さいの目水温む
朝市の七輪に焼く目刺かな
摘草の小瓶に挿されブランチ

蝌蚪の紐

天野美登里

下駄箱にうすきほこりや土雛
白椿庭の夜雨はあがりけり
見せくれし馬穴の中の蝌蚪の紐
菜の花の暮るころ鳥飛びきたる
春の闇防空壕に空の瓶
酒蔵のとなりは空地猫の眼草
犬小屋は留守でありけり花辛夷
遅き春洗濯物がゆれてゐる
花に酔ひつつ街の夜のハイボール
春の雲うつす流れをくづす鯉

パスタ

小山陽子

また止まる形見め時計春灯
七回忌今年は一分咲きの梅
春炬燵みどりの飴はメロン味
裏道に勿忘草の鉢売られ
春め夜風呂場の方でコンと鳴る
不規則なトンカチの音春眠し
春眠し往來の音聞くばかり
クレープの移動販売冴返る
目ん玉はパスタの上のしらすにも
春雨や掃除の後の広き部屋

春
眠

白石正躬

身を縮め春めく川に出でにけり
麦青む畑まだ荒き風の中
川べりの砂利を踏みゆく春の雲
耕しの人なき畑に耕耘機
大風の二月の川をわたりけり
雲走る春の雲見る焼芋屋
蓬摘む岸にダンプの土煙
墓にまづ土筆ん坊が頭出す
永き日の百円で撞く寺の鐘
春眠の耳に社の鈴の音

春落葉

秋山信行

鱒起し塩焼小屋の鎖されをり
着ぶくれて子等に添ひゆくポランテイヤ
空缶の磧にひかる枯尾花
登校の双子は同じマスクして
ジヨギングの歩幅せばまる寒の朝
うすらひの手水北山の風わたる
座布団をちよいと枕の春の昼
春風を昇段の子の戻りくる
向かひ家は鎖されしままに春落葉
をとこ坂のぼりて枝垂桜かな

寒 椿

久世孝雄

かたはらに大型バイク寒椿
鳩に餌をまく子の声や春隣り
春一番胸のつかへを落としけり
春嵐畑の表土真つ平
目礼ですれ違ふ径草萌ゆる
巢立ちせし娘へ幸あれと雛飾る
餌台に今朝も群がり囀れり
雲なびくうす水色の春の空
春夕焼鳩舎に戻る鳩の群れ
水温むひよこと首出す緑亀

春時雨

有賀昌子

日だまりに咲いて寒木瓜ふたつ三つ
笹子鳴くふたりの朝餉賑やかに
うららけし旧き家より琴の音は
子らの踏む音は轍の薄ごほり
春寒し勲かぬままのハシビロコウ
参道の右に左に梅の花
露の臺話のはづむ小半時
三月の十一日に孫生まれ
亀鳴いて脳の検査の異常なく
別れ行く日の学び舎に春時雨

みかん

松村光典

やすみなくそら掃くけやきからつ風
鳥よ来いみかん置いたぞ早く来い
風の音はガラスの向かう日向ぼこ
大寒に入りて日差しの強まれり
澄みわたる二月満月露天ぶろ
沈丁花蕾を朱く尖らせ
春一番じやんけんぽいと子ら弾む
節分に土佐の文旦届きけり
紫木蓮わんさわんさと咲き誇る
クレマチス綿毛となりて去りにけり

群をなし雀飛び立つ浅き春
薄ぐもり曇りと変はる雨水かな
日は庭に水木の蕾まだ固く
今日もまた独りの昼餉目刺焼く
古里の友の便りや春一番

柳田美代子

梢を行く風のこと聞く冬の夜
百円入れ無人売場の葱を手
石段の先に山門桜咲く
梅見する屋敷に入れば井戸のあり
雛の顔皆ふくよかに緋毛氈
墓石の朱文字くつきり沈丁花
お茶碗にお茶を継ぎ足す春炬燵

山本久枝

湯本正友

手のパンを掠め飛び去る都鳥
羽に風孕ませせて飛ぶ都鳥
焼き芋屋の声が来てゐるビルの谷
行き過ぎて梅の香ききにまた戻る
菜園の土の膨らみ二月尽
球場のベンチに届く日ののどか
寿司飯を扇いでさます雛の宴

湯本実

子供靴並ぶ玄関年始め
着ぶくれてゴミ袋出す夜明けかな
客帰り再び羽織るちやんちやんこ
荒寺の磴崩れをり仏の座
長き日の五重の塔に鳥の声
雛壇に折鶴残し孫帰る
菜の花や客疎らなる路線バス